

現代都市におけるスポーツと情報の交錯

——皇居ランを事例として——

成城大学

新倉貴仁

1 目的

本報告の目的は、ランニングを社会的事象と捉えることを通じて、2000年代以降の都市東京の変容を考察することにある。東京マラソンが2007年から開催され、皇居ランが東京の文化としてメディアに紹介されるなど、ランニングは現代都市における文化現象として欠かすことができない。都市を走るランナーたちの現在と歴史は、都市東京のどのような変容と共振しているのだろうか。

2 方法

ボードリヤールはランニングを消費社会の形象として論じている（Baudrillard 1990=1991）。同時に、多木浩二が、スポーツについて、記録と勝敗を通じてデジタル化と接続することを論じるように、ランニングもまた情報化と親和的であることである（多木 1996）。

本報告では、このようなランニングと情報技術との関わりについて、以下の点に注目し、歴史社会学的探求を行なっていく。第一に、ランニングと皇居ランの歴史を探究していく。第二に、とりわけ2000年代以降の都市空間の変容と皇居ランとの関係の考察である。

3 結果

皇居ランの成立は、メディア空間において、1964年の東京オリンピックでの円谷幸吉の活躍と結びつけられ語られている。1968年に自殺を遂げる円谷に対して、ランニングは市民スポーツとしてひろまり、1970年代後半に皇居周辺で走る人々への注目が集まる。これは、世界的なランニングブームと並行しており、その背後にはエアロビクス（有酸素運動）の普及など、消費社会化がある。他方、2000年代に入って再び注目される皇居ランにおいては、女性が加わり、ランニングウェアやシューズが多様になる一方で、ランナーたちはスマートフォンやGPS付腕時計などのガジェットを身にまとい、自己のパフォーマンスを計測している。

このような皇居ランの歴史の変容は、1990年代に生じた都市東京の変容を背景としている。すなわちバブルの崩壊にともなって生じた、丸の内エリアの衰退と再開発である。東京駅周辺には高級ホテルが開業し、ランニングステーションが設置される。東京がグローバルなビジネスマンのライフスタイルに適合的なものに改造され、ランナーもまたグローバル化と情報化に対応した身体へと自己を改造していく。

4 結論

皇居ランは、グローバル化、情報社会化、消費社会化という現代社会化がもっともよく観察される対象の一つといえる。2000年代にはいり人口減少と地方の停滞のなかで東京だけが肥大化していく。従来の国民国家の首都としての東京が、別の都市空間に変容しつつある。同時にそのなかで人々の身体が変容していることを見落とすべきではない。それは情報に接続し、情報によって自己の生を記述する身体の在りようであり、常に情報空間を影のように帯びている身体の在りようである。

文献

Baudrillard, Jean, 1990, *La Transparence du mal : essai sur les phénomènes extrêmes*, Paris : Galilée.(=1991, 塚原史訳『透きとおった悪』紀伊國屋書店.)
多木浩二, 1995, 『スポーツを考える』ちくま新書.